

きずな

2016

上川管内公立小中学校事務職員協議会

発行者 広報担当 菊地康子(東川中)

第4号 2016.9.6



新しい学期が始まり、みなさんいかがお過ごしでしょうか。台風による河川氾濫に見舞われた、南富良野町をはじめ、被害に遭われたみなさまにはお見舞い申し上げます。

さて、夏季休業中に上川研修センター講座「学校事務実務」と「ふらのフォーラム」が開催されました。参加されたみなさんから、感想をいただきましたのでご覧ください。

学校事務実務研修を受講して

名寄市立智恵文小学校 笹木 美里

2日間上川研修センター講座を受講して一番心に残った講義は、北野小学校 天野さんの「北海道の学校事務の三つの課題と今後の展望について」です。これまでの学校事務・これからの学校事務の変化を読み取ることができ、大変参考になりました。というのも、新採用のため、今と昔で私たちを取り巻く環境の違いがわからなかったからです。

特になるほどと思った点が2つありました。1つ目は、世代交代の中で丁寧な仕事を心がけるといふ点です。提案を文書化し校内に残して記録化するという点に関して、私自身も助けられています。しかし、過去の資料を読み返しても分からないことも出てきます(例えば旅費請求書の書き方でポータルサイトにない事例等)。その時は他校の事務職員に聞きますが、校内に資料が残っていれば、日ごろから勉強になると思いました。

2つ目は、仕事を囲い込むことをやめて自分にできることを考えるという点です。私はまず児童の名前を覚えることから始めました。4月は忙しく覚える暇がありませんでしたが、少しずつ覚えていき、今では児童全員の名前を覚えました。事務職員の仕事とは直接関係のないことかもしれませんが、児童数30名の小規模校だから

こそできることだと思います。名前を覚えていて良かったことは、以前、少年団を見学していた保護者の方と話しが弾んだことです。そういうところに事務職員が顔を出すことは、保護者・地域とのつながりができるきっかけになったり、事務職員という存在のアピールにつながったりするのではないかと感じました。

分散会ではBグループで多くの方と交流しました。老朽化により新しく購入した・改築した等、皆さんが教育環境整備にどう関わっているのかを知ることができました。私は教材室の整理など、まだ小さなことしかできていないと思うので、自分の視野を広げ、学校の色々なところに目を向けて問題解決していけるように努めていきたいと思いました。

学校事務実務研修を受講して

美深町立仁宇布小中学校 鈴木 くるみ

今回の研修講座を受けて、自分の中で感じたこと、考えたことがあります。それは、もっと周りの学校の問題や課題を真摯に考えようということです。

それまでの私は、学校はどれも違うし、職員も違うし、子どもも地域も違うし、同じ問題を考えてみても解決の仕方も結果も違うはずなので、他の学校の問題や課題に対して、恥ずかしいですが、そういうこともあるのかあ、くらいで聞いていたところが少なからずありました。

しかし二日目に行われた分散会の各学校紹介の中で、他の学校の問題を一緒に丁寧に考える先輩事務職員の姿を見たことで、客観的に連携の形を見ることができ、私は“一緒に考える”という点で連携が図れていなかったことに気づかされました。

イメージとしては、自分が円の中心、自分を助けてくれる周りを円周としたら、私は円の中心になっているだけで、他の円の円周になれていないと感じました。しか

も、図を描きながら考えているうちに、そうやって他の円の円周にならずにいると、自分である中心があってもなくてもいいような、中心が自分じゃなくてもいいような、自分が代替可能な存在のように感じられてきました。そして他の人でもいい、むしろ人じゃなくシステムでもいいとなると、将来事務職員不要という選択を後押しする根拠にもなり、このままではいけないとこれまで以上に強く感じました。

まだまだ採用されて日も浅く、周りの方にたくさん助けてもらいながら仕事をしている私ですが、これから先は少しでも自分の経験や感覚を自分だけでなく、周りにも還元できるようになればいいと思います。そのためにも、丁寧に日々の仕事に向き合うこと、難しい！わかんない！と考えることを投げ出さず、積極的に様々なことを学習することを心がけようと思いました。

ここまで書いて、すべて当たり前だなんて自分自身思います。が、当然のことを当然のように続けていくことは難しいと思うので、きちんと続けていきたいです。



学校事務実務研修を受講して

士別市立士別中学校 有賀陽平

私は上川と旭川の事務職員の皆さんと情報交流したいと思い、2日目ではありますが上川研修センター講座の『学校事務実務』に出席してきました。

天野さんの講義は、「北海道の学校事務」を取り巻く課題と「北海道の学校事務」が自ら作り出している課題に対し、上川がすすめる教育環境整備の視点が、課題解決に結びつくということ自身の実践も通して分かり易く教えていただきました。天野さんのお話はいつも楽しくて分かり易くお聞きすることができるので大変勉強になります。天野さんが作成するような高いクオリティのムービーをいつか私も作ってみたいです。

分散会では『自校の校舎内外の写真による学校紹介』をテーマに自校の“いいところ”と“イマイチなところ”を交流しました。旭川の方が夏休みに実践した教材室の大掃除の事例紹介では、写真で驚愕のビフォーアフターを見ることができ、グループの皆さんは騒然としていました。

上川の研修会も情報交流ができて勉強になっていますが、旭川出身の私は、母校のある旭川の小中学校にも少なからず興味があり、この研修会は私にとって上川の

皆さんに加えて、旭川の皆さんとも交流できる貴重な機会になっています。持ち寄った資料を見ながら様々な方の話を聞くことができたので出席して良かったです。

「赴任していきなり新しい提案はせずにまず1年間は観察する」「年度末反省時や関係者などに事前に根回しをしてから提案する」などと在籍年数と提案に関わる話もありました。私自身は異動の時期までが短いので、交流で学んだことを持ち返って、自校での残りの期間で何ができ、何を果たせるのかを考えながら取り組んでいきたいと思います。

また、各学校の学校紹介を聞いて、本校とは違った特色のある他の学校で働くイメージを膨らませることができました。まだ早いですが少しずつ異動にも備えていきたいです。

上事協と旭事協が隔年で上川研修センターから事業委託を受けて開催されている「学校事務実務」研修講座ですが、今年度は上事協が企画・運営を担当しました。

参加者から、たくさんの学びや気付きを得られたとの感想を得ることができ、運営を務めた役員も報われことと思います。

次年度も同時期に2日日程で開催される予定です。みなさんの積極的な参加をお待ちしております！



続いて、ふらのフォーラムについての熱い感想をどうぞご覧ください！

2016 ふらのフォーラムに参加して

美瑛町立美瑛東小学校 大森由隆

以前から美瑛にいるうちに出席しなければと思っていました「ふらのフォーラム」に参加しました。期待過剰か、はたまた偏見からか、かなりマニアックな内容で（道立から来た）私では入っていきづらいのではとドキドキして会場に入りましたが、かなり良い意味で予想は裏切られ、グイグイ気持ちが入ってってしまう内容でした。

日程は7/25と7/26の2日間で、1日目は山部中

学校の菅原さんのレポート「富良野市の学校間連携のさらなる深化・発展」と兵庫県大学教授の尾崎先生の講演とシンポジウム A。2日目は同じく尾崎先生の講演と日本大学文理学部教授の末富先生の講演とシンポジウム B でした。シンポジウム B では東川第二小学校の紙谷さんから上事協研修部がすすめる「教育環境整備」についての発表もありました。

菅原さんのレポートは、①子どもたちにとっての「学校」とは②「学校事務職員」が置かれる理由を出席者に問いかけて、③「富良野市学校間連携がめざすもの」について熱く語られておりました。ラストスパート！？万感の思いが伝わってきました。

尾崎先生の講演は、①持田・岡村先生の公教育論を学校事務職員のあり方からめて領域の考え方から現在に至る過程を整理していただき、②教育条件整備から教育環境整備についてを地域論にまで広げ、学校間連携の可能性として地域に新しい教育共同体を創出していく事例として韓国の運動についてお話しいただきました。道立経験の長い私としてはすべてが新鮮でグイグイ引き込まれました。疎外論からとらえ直す教育・事務、標準化でき得ない教育にとって本質的な仕事とポジションベースの組織論、公教育が教育を目的化することで生じる〈保証と支配〉関係の危うさ、教育を私的個人的なものから社会事業として新しい教育事業体を創出していくことで市民社会における教育秩序を組み替える可能性が拓かれるなどと、どれも素晴らしいものでした。何かを教えるための対象としての地域・環境ということではなく、地域・環境そのものを考えることは、まさに教育そのものを考えることに他ならない、地域と学校を生活者レベルで結びつける役割を担い、教育の仕事の組織化から社会関係の組織化へとつなげて行く可能性についてを、私たちの学校間連携は地域の教材化と社会関係の組織化にも道をひらくものだということを改めて気づかせていただきました。また、韓国では進む少子化と学校の小規模化の中でも教育福祉を理念とし、一定の人事権・教育課程編成権・予算権をもった自律した韓国版チャータースクールが生まれたことが紹介されました。具現化する要因として教職員の実践力と地域全体が教育の現場であり住民教師として活躍する“教育・労働・協同”の民間の社会運動、教育運動の存在があり、そのうねりが地方教育自治法改正と教育監の住民直接選挙制導入→革新系教育監登場→京機道で「革新学校（大規模・競争・管理から小規模・協力・コミュニケー

ションへ）」→小規模再生モデルに止まらず公教育改革モデルになったことが紹介されました。何処かの国の教育委員会制度とは真逆を行く方向性ですね。学校間連携から地域連携への広がりが新たな教育改革へとつながる可能性を含んでいることを自覚させられました。また、この学校自治には学校事務職員配置が必須であり教育行政職員は明確な職務区分がなされておりそのポストに対応する権限・地位・身分が明確に制度化されているそうです。私たちとしては領域的实践を取り入れることで実現できる教育実践とはどのようなものか明確に示せるのが課題だと思われまます。革新動力のシステム化、持続可能性のためには体系化が必要で、そのために教育課程の地域化の完成（教職員がコスト削減や統治の客体ではなく、教育ガバナンスの共働主体になる）→学校づくりからマウル（村）づくりを通じて公教育の正常化へ導くことができるとおっしゃっていました。慧眼です。すごい。

末富先生の講演は、子ども達に本当に必要な力とは何か見つめ直すことの重要性を訴えられ、先進自治体の教育政策にはテストの得点などはどこにも出てこないことを挙げられた上で、①国・地方における子どもの貧困対策の説明と切れ目のない総合的な支援のために（チーム学校改革とあわせて）学校プラットフォーム化への期待と効果が現れるまでには8年以上かかる現実をみつめて、長い目で見た取り組みが重要であること、②現在の学校・教育委員会連携の理想と現実について難しい状況をご説明されながら、静岡市と大阪市のSSW（スクールソーシャルワーカー）活用と成功事例で校内居場所（カフェ）設置の成果を紹介され、目につきやすい非行系・リスク系や扶養能力のある中流以上の家庭環境にいるひきこもりといった子ども以上に深刻な問題をはらんでいるのが校内でもっとも目が届きにくい「ぼっち系」でありその対策としての居場所づくりの必要性を説明されていました。③成功要因であったSSWについては、無力な子を上から指導するのではなく、本人あるいは保護者、学校関係者との協働を図り、個人の病理ではなく不適合状態への対処力を高め、環境が個人のニーズに 대응できるように、連携・仲裁・調整、チームの見立てを多角化する役割をもつこと、④これからの支援型学校マネジメントにおける校内体制について、思いを伝える場のない子への「きづき」→「つなぎ」→「居場所づくり」による新しい校内体制によって生まれる「ささえあい」が生徒の改善につながり、学校事務職員こそ

が「つながり」を整理し切れ目のない支援に貢献できるのではと訴えられていました。特にSSWとは「教員以上に「子どもの利益」を重視すること」と語られる中で、教育機関では子どもにいろいろな角度からアプローチする多様性のある職員構成こそ様々な相乗効果を生むこと。教員だけでも、SSWだけでも成り立たない、子ども達に近い社会人として寄り添い(教員やSSW以上にすべてを受け入れるという意味ではない。冷たいようですが距離感・疎外感をもって矛盾を見つめ直す学校事務職員観が重要だと思います)、スタッフと学校と社会をつなぐ学校事務職員の役割と可能性を再確認できました。

紙谷さんの発表は言うまでもありません。私たちの今の活動を30年前からの流れの説明から始まりなぜ「教育環境整備」なのか、どんな活動なのか丁寧に説明されていました。忙しい中、私たちの中央ブロックを代表していつも原稿をつくり発表していただきありがとうございます。頭が下がります。

私がふらのフォーラムに参加して思ったことは、私たちの現在の頑張り実践手法を発信し、磨くミクロ的なものが全道研だとすれば、このふらのフォーラムは(書くとしらぶが難しいですが)、私たちの内を過去からの理論で存在理由を再確認し、外の事例を見聞きして学校事務職員の未来についてビジョンをもつマクロ的なものなのかなと思いました(恥ずかしいです)。現代は様々なことを標準化・簡略化・効率化する時代ですが、私たちの仕事はインフォーマルなものが多く最も標準化できないもののひとつだと思います。従って先達や自分たちが積み上げてきたものも暗黙知にもとづくものが多く、立ち止まって形式知化して頭の中を整理して、未来を確認し合う場がどうしても必要だと思います。今回参加して、ふらのフォーラムはまさしくそのような場だと実感しました。主催していただいた皆様、貴重な機会をご提供いただきまして本当にありがとうございました。皆さんも来年、ふらのフォーラムに参加しましょう！ふらのフォーラムは可能な限り、継続していくべきだと思います。

長文になってしまいすみません。末富先生から子どもの貧困について、胸に響いた詩の紹介がありました。私も胸に響きました。最後にその詩を載せて、感想を締めくくりたいと思います。学校に生きる私たちだからできることを、もう一度見直したいです。

州 史(しま ふみひと)「修学旅行に行けないとは」

お金が払えないから
修学旅行に行けないとは
それは
修学旅行が終わった後の地理や風土の学習
感想作文に取り組めないということ
同級生と話す時
突然欠落した部分があることに気づかされること
卒業アルバムの修学旅行のページに一枚の写真もないということ
卒業式の呼びかけで 友だちが「楽しかった修学旅行」と言う時
ただ 立ちつくすしかないということ

お金が払えないから
修学旅行に行けないと、学校に働くあなたが当たり前のように言う時
あなたは何を投げ捨てたのか
それさえも気づかないということ



2016 ふらのフォーラムに参加して

中富良野町立西中学校 宮崎嵩大

7月25日～26日にかけて富良野市で開催されたふらのフォーラムに参加しました。テーマの副題は『地域社会や市民に開かれた自由な場所としての学校をもとめて』で、海外の事例や本州の貧困問題対策など、各地での取組を聴ける貴重な機会となりました。また、参加者は幅広く全道各地・本州から参加されています。

兵庫県立大の尾崎教授からの報告では、韓国・ホンドンでの田園学校事業の事例が紹介されていました。韓国では小規模校に学校裁量権と予算をあたえることで学校ひいては地域を活性化させようとする取組が行われており、なかでもホンドンの南漢山小は学校自治・地域自治の代表事例でした。教員・保護者・地域住民で組織される学校運営委員会には人事・教育課程・予算の議決権があり、2,000万円規模の予算に裁量権があります。事務職員の配置数は教員13名に対し学校事務6名

の配置となっています。尾崎教授は、学校自治には学校・地域に密着した存在として事務職員が必須となることを指摘されていました。尾崎教授はこうした取組を自分たちの陣地を拓いてゆく陣地戦と表現されていましたが、フォーラムの冒頭で山部中の菅原さん話されていた「学校間連携は特定の市町村だけで進めてもあまり意味がない。北海道全体で行ってこそ」といった内容と重なる面があるかも知れないと思いました。

日本大学の末富教授からは主に大阪での貧困問題対策について報告がありました。就学援助制度については全体で6割程度の認知度で、制度を知らない対象家庭もあることから、引続き就学援助制度を広く周知していくことが必要な状況でした。印象的だったのは、大阪府茨城市の低位の子どもの学力向上を目標にして、まず生活習慣の改善から始めた取組と、西成区での学校に馴染めない子どもに、教室でもなく保健室でもないカフェに似た居場所をつくった取組でした。教育環境整備といえば教材・教具がまず頭に浮かびますが、「子どもの生活の場」として学校を考えると、環境整備には子どもにとって生活しやすい環境や落ち着ける居場所なども対象に広がってゆくのではと聴いていて感じました。

シンポジウムでは各管内の方々のパネラーとなり、管内の学校間連携会議の現状について交流がなされました。空知からは子どもアンケート等の取組は行っているがその目的について話し合いが足りないと感じていることや、北見からは取組例として見学学習のバスの無償化・給食費の一部補助・手数料の増額についてのこと、旭川からは組織はあるが余り機能していないことなど、多くの意見が挙げられていました。また、全体では学校間連携会議が組織ありきで進められている面もある、学校間連携会議は教育環境整備・教育機会の公平性の確保・課題解決の場のための手段なので、方法は各市町村の実情に応じて様々あってもいいのでは、人が変わっても継続していく仕組みが必要なのは、保護者が学校予算がどう使われているのか関心が高まっていると感じるという意見があがっていました。

長期休業中に研修をもつことがなかなか難しい現状ですが、今回のフォーラムは貴重な研修の機会となりました。最後にフォーラム開催に向けて尽力された運営委員の方々、ありがとうございました。

ふらのフォーラムの準備・運営をくださった富良野市学校間連携会議のみなさん、ありがとうございました！

ふらのフォーラムの記録につきましては、富良野市学校間連携会議 HP「ふらーぬい」に掲載予定されています。



9月8日・9日は第66回北海道公立小中学校事務研究大会（釧路大会）です！

上川管内からは全道大会へ40名の参加申込み（要項のみ希望者含む）がありました。台風10号によるJRの不通や各道路の通行止めなどがあるため、開催が心配されましたが、北海道公立小中学校事務職員協議会事務局橋本正明さんより、予定どおり研究大会開催の連絡が上事協 web に入りました。参加されるみなさんは、交通事故に十分気をつけてご参加ください。

第三分科会で発表されます富良野ブロックのみなさん、思いの丈を存分に伝えてきてください！応援しております！！

また、各分科会のお手伝いをされる役員のみなさん、お疲れ様です。大変な役を引き受けてくださってありがとうございます。よろしくお願いいたします。

そして、全道大会に参加される会員の中には、上事協理事より分科会参加報告（感想）を依頼されている方もいらっしゃると思います。残念ながら、全道大会に参加できない方のために、大変だとは思いますが、報告書の作成よろしく願いいたします。いただく原稿は次回きずなかわら版に掲載させていただきます。

